

ひとつの火

新美 南吉
にいみ なんきち

私が子供だった時分、私の家は、山の麓ふもとの小さな村にありました。私の家では、ちょうちんやろうそくを売っておりました。

ある晩のこと、一人の牛飼いが、私の家でちょうちんやろうそくを買いました。

「坊やぼや、すまないが、ろうそくに火をともしてくれ。」

と、牛飼いが私に言いました。

私はまだマッチを擦すったことがありませんでした。

そこで、おっかなびっくり、マッチの棒の端はしのほうを持って擦すりました。すると、棒の先に青い火がともりました。

私はその火をろうそくに移してやりました。

「や、ありがとう。」

と言って、牛飼いは、火のともったちょうちんを牛の横腹のところにつるして、行ってしまいました。

私は一人になってから考えました。

——私のともしてやった火はどこまで行くだろう。

①
6 【よっぴて】夜通し。一晚中。

あの牛飼いは山の向こうの人だから、あの火も山を越こえて行くだろう。

山の中で、あの牛飼いは、別の村に行くもう一人の旅人に行き合うかもしれない。

するとその旅人は、

「すみませんが、その火をちょっと貸してください。」

と言って、牛飼いの火を借りて、自分のちょうちんに移すだろう。

そしてこの旅人は、よっぴて山道を歩いて行くだろう。

すると、この旅人は、太鼓たいこやかねを持ったおおぜいの人々に会うかもしれない。

その人たちは、

「私たちの村の一人の子供が、狐きつねにばかされて村に帰ってきません。それで私たちは探しているのです。すみませんが、ちょっとちょうちんの火を貸してください。」

と言って、旅人から火を借り、みんなのちょうちんにつけるだろう。長いちょうちんや丸いちょうちんにつけるだろう。

そしてこの人たちは、かねや太鼓たいこを鳴らして、山や谷を探して行くだろう。

私は今でも、あのとき私が牛飼いのちょうちんにもしてやった火が、次から次へ移されて、どこかにともっているのではないか、と思います。

7 【おっかなびっくり】こわごわ。怖こわがりながら物事をする様子。

【著者】新美南吉（にいみなきち）

一九一三（大正二）年—一九四三（昭和一八）年

児童文学者。愛知県の生まれ。

【著書】『おじいさんのランプ』、『こん狐』、『手袋を買いに』など